これからの大学のトレンドを
＼大学事例から読み解く／

大学レポート 2016

教育は時代とともに変化していますが、特に大学教育は、
時代の変化の波を一番受けやすい場所といえるかもしれません。
国や企業に近く、国境を越えた大学間の連携や競争もあるためです。
大学キャンパスで今どんなことが起きていて、これからどんな変化が起きそうか、
大学全体をトータルに見る視点と、
個別の大学をつぶさに見る視点とから読み解いていきます。
お子さんの大学選択や将来の方向性を考える際の参考にしてください。

保護者も知らないではすまされない！
これから「大学」も「大学入試」もこう変わる！

教育改革 Educational Reform

國學院大學 …… p.30
帝京大学 …… p.32

キャリア教育 Career Education

千葉商科大学 …… p.34
東京家政大学 …… p.36
東京農業大学 …… p.38

保護者も知らないではすまされない！
これから「大学」も「大学入試」もこう変わる！

大学入試センター試験を廃止して創設する「大学入学希望者学力評価テスト」（仮称）のあり方が、新聞紙上などをにぎわせています。同テストは2020年度の高校3年生（今年度の中学校2年生）からが対象なので、現在の高校1年生には直接関係がありません。しかし、なぜ新テストが必要なのか、と考えると、1年生どころか、来春に受験を控えた3年生にまで関係してくる状況が浮かび上がってきます。大学教育と、それに伴う個別選抜の、大きな変化です。

文／教育ジャーナリスト　渡辺敦司

知識の再生から思考力重視へ センター試験を新しいテストに変更

これまでの大学入試は、1点刻みの「知識の再生」にこだわりすぎていた。もっと思考力などを重視しなければいけない――。中央教育審議会（文部科学相の諮問機関）は2014年12月の「高大接続改革答申」で、そう提言しました。

センター試験を学力評価テストに替えるのも、そのためです。具体的には、①思考力・判断力・表現力を中心に評価する②「教科型」に加えて「合教科・科目型」「総合型」の問題を出題する③多肢選択式（マークシート方式）だけでなく、記述式を導入する④年複数回実施する⑤1点刻みではなく、段階別表示にする⑥CBT（コンピュータ利用型テスト）方式を検討する⑦英語は「書く」「話す」も含めた4技能をバランス良く評価する――としています。

答申を受けて下村博文文科相（当時）は15年1月、「高大接続改革実行プラン」を策定しました。大臣や首相、あるいは政権が変わったとしても、工程表どおりに改革を貫くためだと説明。翌2月に答申具体化のための「高大接続システム改革会議」を設置し、その座長に中教審会長だった安西祐一郎を据えたのも、そうした意気込みの表れでした。

その後同会議が9月にまとめた「中間まとめ」からは「合教科・科目型」「総合型」という文言は消え、教科を基本に出題する方針が示されました。代わりに、次期高校学習指導要領（22年度入学生から全面実施の見通し）で創設される、数学と理科にまたがる「数理探究」（仮称）を出題対象とすることにしました。

解答形式についても、マークシートながら組み合せによって複数の正解があるような「連動型複数選択問題」のほか、記述式では現行指導要領下（23年度まで）で「短文記述式」、次期指導要領下（24年度から）で「より文字数の多い記述式」を導入するとしていました。しかし中間まとめの後、同会議では、記述式の導入を当面、国語と数学に絞るとともに、「条件付記述式」で最大300字程度に限定する方針が示されました。さらに複数回の実施も当面は見送り、記述式はマークシート方式とは別日程で行うことにしました。

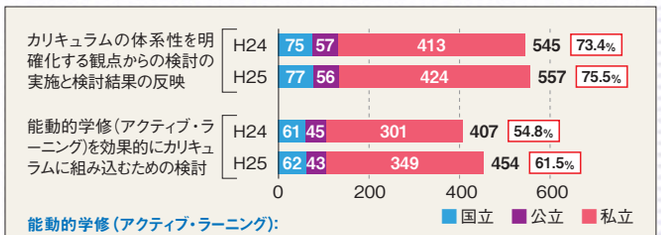
一方で、知識偏重と批判していたセンター試験に対しても「与えられた問題を分析的に思考・判断する能力の評価に優れている」などと、評価を微妙に変えています。

16年度センター試験は、国公私立の693大学157短大が参加。志願者は56万人を超え、実際にも約53万人が受験し、現役高校生の4割が受けています。作問に当たっては全教科書を読み込んで「かなり高校教育に配慮した良問が出題されている」と関係者の評判も上々です。大学・短大志願者という限定付きながら、高校生の学力保証に一定の役割を果たしてきたのも事実です。

このようなセンター試験の良さも認めながらも、思考力等を測ることを目指し、現実の技術やコストと向き合いながら進められているのが新テストの議論なのです。

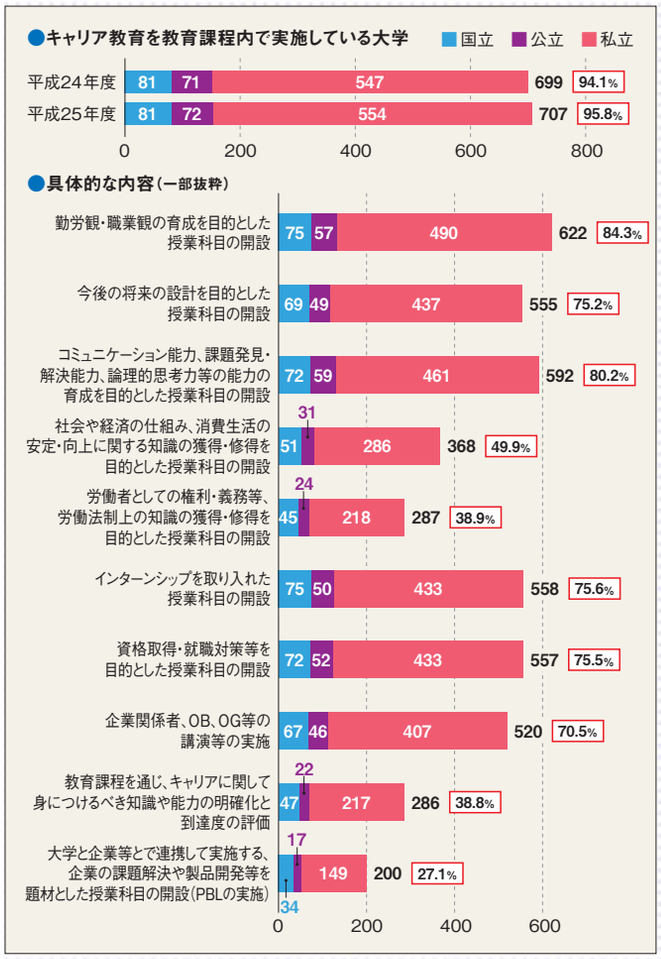
工程表に従えば、システム会議の最終報告を受けて新テストの実施方針を固め、17年度からプレテストに入ることになります。中2以下の生徒は気が気でないことでしょう。

図1　大学のカリキュラム編成上の工夫の具体的な取り組み状況（一部抜粋）



能動的学修（アクティブ・ラーニング）:
教員の一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学修法を指す。発見学修、問題解決学修、体験学修、調査学修等が含まれ、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効な方法とされている。

図2　大学のキャリア教育の教育課程内での実施状況



資料出所:文部科学省「平成25 年度の大学における教育内容等の改革状況について」

大学で始まっている カリキュラム見直しや アクティブ・ラーニング導入

しかし今回の改革が、今の高校生にも無縁だとは言えません。「大学入試改革」ではなく「高大接続改革」と呼ばれているところに、それが如実に表れています。

高大接続改革は、大学教育、高校教育、そして「大学入学者選抜」を一体で改革するものです。元々は中教審の大学分科会（当時の分科会長は安西氏）で「大学教育を変えるには、学生を送り出す側の高校にも教育を変えてもらわなければならない。そのためには、教育を変える弊害になっている大学入試を変えることも不可欠だ」という論議が起こり、12年8月の答申・諮問を経て、始まったものでした。

つまり高大接続改革の究極の目的は、大学に入ってからの教育で学生を鍛え、社会から評価される卒業生を送り出すことにあるのです。

国立大学も含め、各大学では、学部改組やカリキュラムの大幅な見直しを進めています。座学だけではない、さまざまな活動をさせながら学ばせる「アクティブ・ラーニング」は、次期指導要領の目玉として高校の先生たちからも関心を集めていますが、元々は大学教育の手法でもあり、導入検討が進んでいます（図1）。

教科や学問領域の勉強だけに終始し、単位を積み上げて卒業できれば将来は安泰――という時代では、もうなくなっています。4年間の大学教育で何に取り組み、どういう資質・能力を身につけ、それを基にどう仕事に貢献できるかをアピールできなければ、厳しい就職戦線を勝ち抜くことさえできません。

多くの大学がキャリア教育を教育課程内で実施し、コミュニケーション能力などの育成を目的としたり、企業などと連携して製品開発等を題材とする授業なども始めているのはそういうわけなのです（図2）。

変わる大学教育に耐え得る学生を採ろうと、各大学では入試方法を工夫しようとしています。今春の入試から東京大学が「推薦入試」を、京都大学が「特色入試」を導入したのは、そのきっかけにすぎません。

現在の「大学入試」が知識偏重と批判されているのも、実際のセンター試験は工夫を重ねていても、肝心の受験生が知識丸暗記で解こうと狭い「試験対策」に終始していることにも問題の一端があります。

改革に 取り組んでいるかどうかを 志望大学選択のポイントに

すでに変わりつつある大学教育を見据え、高校3年間で幅広い勉強や体験を行いながら、思考力や主体性も含めた「真の学力」を伸ばさなければなりません。大学に入ってから困るのは、今の生徒たちなのです。

保護者としても、その大学が真の学力を伸ばしていくためにふさわしい改革に取り組んでいるかどうかを、わが子の志望大学選定のポイントに入れたいところです。